

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00674

研究課題名(和文) 高次表意と証拠性/意外性をめぐって

研究課題名(英文) Higher-level Explicature and evidentiality/mirativity

研究代表者

内田 聖二 (UCHIDA, SEIJI)

奈良大学・その他部局等・特別研究員

研究者番号：00108416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は言語類型論でいう、証拠性と意外性という文法的カテゴリーを関連性理論における、高次表意という考え方をを用いて再検討するものである。証拠性は新情報の情報源を明示すること、意外性は新情報と既知情報の差が予想外のことであることと、密接な関係があるが、その言語上の具現化は言語によって異なる。たとえば、英語や日本語では証拠性や意外性を直接表す、ある種の形態素ないし小辞は一般にないとされている。ただ、英語にも日本語にも情報源や意外な気持ちを表現する言語手段はもちろん存在する。本研究では、このような言語事象の具現化が英語と日本語では異なることを指摘し、高次表意の観点から統一的に説明できることを示す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は証拠性・意外性をテーマとしているが、これらの概念は人間の言語コミュニケーションの根底にあると思われる。そういった想定のもと、本研究では証拠性が英語、日本語においてどのように言語的に反映されるのかについて、高次表意という認知語用論における概念を援用して考察してきた。従来の日英比較は、語彙、意味、統語といった固定した観点からの比較であり、昨今はこれといった進展がみられないが、本研究における語用論的アプローチからの比較は斬新で、今後の日英語比較に新しい展開をもたらすものと確信する。

研究成果の概要(英文)： The present research focuses on 'evidentiality' and 'mirativity' in linguistic typology referring to 'higher-level explicatures' proposed in relevance theory. Evidentiality and mirativity can be defined as 'a linguistic category whose primary meaning is source of information' and 'a category whose primary meaning is related to unprepared mind, new information, and speaker's surprise' (Aikhenvald 2004) respectively. They are linguistically realized in various ways depending on language types. English and Japanese, however, do not have such particular morphemes or particles, but we do have linguistic devices equivalent to the phenomena of evidentiality and mirativity. We are to discuss and explain in terms of higher-level explicatures how those linguistic behaviors differ in English and Japanese.

研究分野：言語学、英語学

キーワード：認知語用論 関連性理論 証拠性(evidentiality) 意外性(mirativity) 高次表意

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで以下の基盤研究(C)¹(いずれも研究代表者)の支援を受けてきたが、これら一連の研究には次のような系統だった展開がみられる。

メタ表象現象の実際 引用現象とメタ表象現象との関連性 日英語比較の新しい観点として認知語用論的視点が有効 高次表意が言語的に具現されるか否かが日英語の根源的な差のひとつ 認知語用論からみた英文法の再編

1 「メタ表示能力と言語獲得に関する認知語用論的研究」(平成17年度~19年度)、「ダイクシスから引用へ:認知語用論からのアプローチ」(平成20年度~22年度)、「新しい日英語比較対照研究 認知語用論の視点から」(平成23年度~25年度)、「文法項目の再編に向けて 認知語用論の視点から」(平成27年度~29年度)

こういった研究からメタ表象現象としての引用と引用元の(非)明示が日英語において高次表意という点で興味深い違いがあることが明らかとなった。また、情報源の(非)明示が証拠性、意外性という文法的カテゴリーで論じられる現象と相通することから、それらを認知語用論的視点から処理できるのではないかとに着想に至った。

国外におけるもっとも網羅的な文献には Aikhenvald (2004)²がある。ほかに証拠性にかかわる論考を中心に多数あるが、本稿のように証拠性と意外性を認知語用論の観点から関連づけようとするものはない。ちなみに、関連性理論の枠組では Ifantidou (2001)³があるが、軸足は表出命題の真理値にある。なお、そこでは意外性への言及はない。また、国内では、2015年の第33回日本英語学会で「日英語を対象にした Mirativity 研究:統語論・意味論・語用論」と題したワークショップがあり、徐々に関心が高まっているようであるが、本研究のようなアプローチは見当たらない。

以上の研究背景が本研究の出発点である。

2 Aikhenvald, A. Y. 2004, *Evidentiality*, Oxford University Press.

3 Ifantidou, E. 2001, *Evidentials and Relevance*, John Benjamins.

2. 研究の目的

本研究の目的は以下のようにまとめることができる。

・証拠性と意外性は異なる文法的カテゴリーとされるが、たとえば、意外性を含意する感嘆文は目の前にある直接的な証拠に基づいているといえる。すなわち、「強い」証拠を根拠としているということは、証拠性と意外性は峻別可能なカテゴリーというよりは連続性のあるカテゴリーと考えられる。その妥当性を探る。

・一般に、英語と日本語には意外性を反映する形態素/小辞は特に見当たらず、その点では差がないとされるが(島田 et. al., 2016)⁴、高次表意という観点では、英語で具現されない場合でも日本語では言語化されるという大きな差がある。この差はどこに起因するのか追究する。

・関連性理論における高次表意については「発話行為と命題態度などを反映する」(Wilson and Sperber 1993)⁵とされるが、証拠性は発話行為に、意外性は命題態度に密接に関連する可能性を検討する。また、明確になっていない発話行為、命題態度以外の「など」にかかわる現象がないかどうかを考察する。

・高次表意は、英語では日本語と異なりコバートな形で認識されるため、その理論的位置づけについての議論が少ない。文法カテゴリーとしての証拠性と意外性を関連づけることにより、高次表意の理論的基盤を補強する。

・いわゆる「文法化」と具体的な言語表現との接点をさぐる。たとえば、英語の want では主語の人称の違いにかかわらず want そのものは変化しないが、対応する日本語の「たい/たがっている」のように複雑な照応関係を示す言語との境界を証拠性の観点から観察する。

また、本研究の独自性ないし創造性は次の点に要約される。

・文法的なカテゴリーを認知語用論から再分析すること。
・証拠性、意外性が形態素/小辞などで具現される言語と具体的なことばで表現される言語とを比較する基準を提供できる可能性があること。

・高次表意の存在に対して理論的な理由づけができる可能性が広がること。

・証拠性と意外性が言語的代替表現のある言語では高次表意として具現されるとすれば、人間言語の中心かつ特徴的概念である、メタ表象と結びつけることができ、より説明力の高い一般化となりうること。

4 島田 et. al., 2016, 「日英語を対象にした Mirativity 研究:意味論・語用論の観点から」 *JELS* 33, 218-219.

3. 研究の方法

「証拠性」と「意外性」は従来の研究では混同されることはあっても共通性について言及されることは少ない。(cf. Hill 2012)⁶ 本研究はまずこの二つが同じ土俵上で論じる可能性について考察していきたい。つまり、いずれも新情報と既存情報の相互作用にかかわり、異なる点があるとすれば、証拠性では情報の確認度を自分以外の第三者に求めているのに対し、意外性では、たとえば、状況を目の当たりにした発話者の意外な気持ちを表現するものである点にあると考えたい。

一方、Wilson and Sperber (1993) では高次表意 (higher-level explicature) という概念が導入され、それまでの表意を「基礎表意 (basic explicature)」とし、区別した。具体的には、高次表意は言語化されている発話、すなわち基礎表意の上位レベルに想定する動詞句をいい、発話行為、命題態度 (propositional attitude) などを反映する。(1)を Mary が悲しげに発話すれば、それに対応する高次表意としては(2a) ~ (2c)などがその候補となる。

- (1) Tom: Is there anything to eat?
Mary (sadly): Sorry. There isn't.
(2) a. *Mary says* there is nothing to eat.
b. *Mary believes* there is nothing to eat.
c. *Mary regrets* that there is nothing to eat.

ここでは(2a)が発話行為を、(2b)(2c)が命題態度を反映している。また、Tom と電話で話している Mary に、'What did he say?' と問うたとき次のような発話が返ってきたとしよう。

- (3) Mary: He's coming tomorrow.

この高次表意は(4)のようなものと想定できる。

- (4) *Mary says Tom says* he's coming tomorrow.

さらに、次のような発話も同じ観点で処理できると思われる。

- (5) Tom: Isn't she beautiful!

この(5)はいわゆる感嘆文の一種であるが、これも次のような高次表意で発話者の命題態度を表すことが可能と思われる。

- (6) *Tom is surprised* that she is beautiful.

つまり、これらの高次表意を「証拠性」という視点から見ると、(2a)(2b)は確信度の高い証拠から発話していることが、一方、(3)は Tom から得た情報であることが示唆される。また、「意外性」ということでは(6)における 'Tom is surprised' の部分が関与していることがわかる。

このように、証拠性、意外性にかかわる言語現象を、理論的背景として高次表意を援用して考察していく。

6 Hill, N. W. 2012, '“Mirativity” does not exist: hdug in “Lhasa” Tibetan and other suspects,' *Linguistic Typology* 16, 389-433.

4. 研究成果

2018年度

初年度は、関連性理論における高次表意を念頭におきながら、言語類型論で述べられている証拠性と意外性に関する書籍、論文、研究発表等の主張を整理することを第一のテーマとした。それに従って本研究テーマにかかわる書籍を購入し、かつ国内外の関連学会に参加した。第11回英語学会国際春季フォーラムではとりわけ「fake past」にかかわる口頭発表から「意外性」につながる言語現象が参考になり、それを印刷中の論文「テキストのテンスとダイクシス」に 応用した。アメリカ語用論学会では認知語用論に関する口頭発表に参加し、国内外の研究者と交流することができた。慶應言語学コロキウムでの2日間にわたる西山佑司氏の意味論と語用論の境界についての連続講義はこれからの研究に示唆を与えてくれる有意義なものであった。また、本研究の中心テーマである、高次表意については「'ly + speaking'の語用論」のなかで、英語ではコバートな側面となるものも日本語では言語化される具体例として'ly + speaking'をとりあげ、言語を交差する高次表意の特徴を論じた。

2019 年度

研究 2 年目の 2019 度は、証拠性と意外性にかかわる言語現象が高次表意とどう関連し、どう融合できるかを考察することを目標とした。その研究成果の一端を「証拠性 (evidentiality)/意外性 (mirativity) と高次表意」(奈良英語学談話会、2019 年 12 月) とのタイトルで口頭発表し、本研究課題の中心概念である、証拠性・意外性と高次表意との関係を議論した。さらに、この発表を出発点として、とりわけ、証拠性と高次表意に焦点を当てて、英語の 'according to' と日本語の「...によると...だ」の違いにも言及しながら、「英語と日本語における証拠性表現の一側面」(奈良英語学談話会、2020 年 3 月) を執筆した。なお、2018 年度の研究成果を『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』(共著) の第 13 章「フィクションのテンスとダイクシス」で公刊した。また、伝統的な文法で話題になることが多かった「クジラの公式」の昨今の論争に関して、「いわゆる「クジラの公式」をめぐって」のタイトルで口頭発表を行い、見逃されていた重要ポイントについて考察した。さらに、国際大会の The 18th Annual Hawaii International Conference on Education において、「Constructing a Bilingual Japanese-English Collocations Dictionary: A Corpus-based Approach」(共著) のタイトルで口頭発表を行った。

2020 年度

2020 年度は、高次表意が必ずしも具現されない英語と高次表意が具現される傾向のある日本語との差がどこに起因するのかを解明することが目標であった。この観点から日本語と英語を比較し、かつ比較言語学への応用可能性を示唆した口頭発表を国際学会 EPICS IX で、「Higher-level explicature: Implications for comparative linguistics」のタイトルで行った。(2020 年 11 月 4 日) 当初スペイン・セルビアで開催される予定であったが、コロナ禍のためオンライン形式で実施された。また、第 92 回日本英文学会において、シンポジウム「関連性理論の射程」の講師として口頭発表を予定していたが、種々の理由により、次年度 2021 年のシンポジウムで登壇することになった。また、ヘミングウェイの短編、「Cat in the rain」はこれまでで文学評論、言語学等から広範囲に議論されてきたが、関連性理論の強い推意、弱い推意の概念を用いてまったく新しい視点を導入した「Another look at "Cat in the rain": A cognitive pragmatic approach to text analysis」が *Relevance Theory, Figuration, and Continuity in Pragmatics* (edited by Agnieszka Piskorska, John Benjamins) の第 10 章として刊行された。さらに、いわゆる「クジラの公式」に関して前年度に口頭発表したものを日本語法文法学会の紀要『英語語法文法研究』に受理され、「クジラの公式」再考」として公刊された。さらに、長年編集作業をしてきた『ことばとスコープ 2 否定表現』(五十嵐海理著、研究社) も刊行された。

2021 年度

新型コロナウイルス感染症の影響で研究延長が許可された 2021 年度は、(1) これも前年度からの課題である日本英文学会のシンポジウムで講師を務めることと、(2) 2020 年度にオンライン形式で行われた国際大会の原稿を文字化するすること、の 2 つの目標があった。前者の件では第 93 回日本英文学会において、シンポジウム「認知語用論からみた言語の諸相」の講師として「高次表意からみた証拠性 (evidentiality)」のタイトルで口頭発表を行った。また、その原稿を加筆修正した「メタ表象からみた証拠性 (evidentiality)」を『奈良大学紀要』(第 50 号) で公刊した。中心トピックは本研究の核となる証拠性と高次表意あるいはメタ表象との関係で、とりわけ日本語の感覚・感情表現や願望表現には情報源と当該人物の関係が証拠性と密接にかかわることを論じた。後者の件では、本研究の観点から日本語と英語を比較し、かつ比較言語学への応用可能性を示唆した、国際学会 EPICS IX で行った口頭発表を加筆修正したものを国際雑誌に応募し、現在審査中である。

2022 年度

新型コロナウイルス感染症の影響で再び研究延長が許可された 2022 年度のおもな目標は、2020 年度にオンライン形式で行われた国際大会で発表した原稿を国際雑誌 *Pragmatics* に応募したものを、査読者のコメントを取り入れて改訂することであった。その論点は、本研究のテーマをさらに発展させ、その観点から日本語と英語を比較し、かつ比較言語学への応用可能性を示唆したものである。査読者とのやり取りを経て、2023 年 3 月掲載が決定した。最終稿は次年度の早い時期に提出予定である。

今回の研究を終えるにあたって、テーマの一つである意外性の側面への追究が証拠性に比べ

十分ではなかったとの認識がある。今後に残された課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 内田聖二	4. 巻 50
2. 論文標題 メタ表象からみた証拠性 (evidentiality)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良大学紀要	6. 最初と最後の頁 129-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内田聖二	4. 巻 27
2. 論文標題 「クジラの公式」再考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語語法文法研究	6. 最初と最後の頁 70 - 84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内田聖二	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 英語と日本語における証拠性表現の一側面	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 奈良英語学談話会論集	6. 最初と最後の頁 31-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Uchida, Seiji	4. 巻 online
2. 論文標題 Metarepresentational Phenomena in Japanese and English: Implications for Comparative Linguistics Pragmatics	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Pragmatics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 内田聖二
2. 発表標題 高次表意からみた証拠性 (evidentiality)
3. 学会等名 日本英文学会第93回大会シンポジウム「認知語用論からみた言語の諸相」の講師として
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Uchida, Seiji
2. 発表標題 Higher-level explicature: Implications for comparative linguistics
3. 学会等名 EPICS IX (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内田聖二
2. 発表標題 いわゆる「クジラの公式」をめぐって
3. 学会等名 奈良英語学談話会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内田聖二
2. 発表標題 証拠性(evidentiality)/意外性(mirativity)と高次表意
3. 学会等名 奈良英語学談話会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Uchida, Seiji
2. 発表標題 Constructing a Bilingual Japanese-English Collocations Dictionary: A Corpus-based Approach
3. 学会等名 The 18th Annual Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内田聖二
2. 発表標題 高次表意からみた証拠性(evidentiality)/意外性(mirativity)
3. 学会等名 第92回日本英文学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Uchida, Seiji
2. 発表標題 Higher-level Explicature: Implications for Comparative Linguistics
3. 学会等名 The 9th International Symposium on Intercultural, Cognitive and Social Pragmatics (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内田聖二
2. 発表標題 語法研究と語用論
3. 学会等名 六甲英語学研究会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内田聖二
2. 発表標題 英語から日本語へ、日本語から英語へ
3. 学会等名 奈良県婦人会館講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内田聖二
2. 発表標題 語法・文法研究から語用論へ、あるいは語用論から語法・文法研究へ
3. 学会等名 英語語法文法学会第30回記念大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 Seiji Uchida(Chapter 10, pp. 291-308)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 357
3. 書名 Relevance Theory, Figuration, and Continuity in Pragmatics (edited by Agnieszka Piskorska)	

1. 著者名 五十嵐 海理、内田 聖二、八木 克正、安井 泉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 264
3. 書名 ことばとスコープ 2 否定表現	

1. 著者名 内田聖二（住吉誠、鈴木亨、西村義樹編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 249
3. 書名 『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』第13章「フィクションのテンスとダイクシス」(pp. 226-246)担当	

1. 著者名 鍋島弘治朗、楠見孝、内海彰（編）（共著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 254
3. 書名 メタファー研究 1 （第4章担当）	

1. 著者名 内田聖二・八木克正・安井泉（編） 吉良文孝（著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 282
3. 書名 テンス・アスペクト（「英文法を解き明かす」第5巻）	

1. 著者名 赤野一郎先生古希記念論文編集委員会（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 373
3. 書名 「'-ly + speaking' の語用論」『言語分析のフロンティア』(pp. 61-79)	

1. 著者名 赤野一郎・内田聖二（監修） 山根キャサリン（著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 181
3. 書名 Native Speakerにちょっと気になる日本人の英語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------